

松川七郎

『ウィリアム・ペティ——その政治算術
＝解剖の生成に関する1研究——下巻』

岩波書店 昭和39年2月25日発行 220ページ

〔一橋大学経済研究叢書14〕

上巻が市民革命の前夜(1623—40年)および市民革命＝内乱時代(1640—49年)のペティを取り扱った後を受けて、この下巻は、市民革命＝共和国時代(1649—60年)における政治的社会的諸事情およびペティの活動と、その後、王政復古時代における「グラント＝ペティにおける政治算術＝解剖の成立」を取り扱っている。かつてこの書物の上巻が出版された際、故白杉庄一郎教授は、松川教授の研究を「現代における全く劃期的なペティ研究」と激賞されて(『経済研究』第10巻2号186ページ)、下巻の出版が1日でも速くなることを待望すると言われたが、ここに出版されたのが、その下巻である。

この当時におけるイングランドとアイルランドとの関係は、今日の私たちには想像できないような不幸なものであった。

これより前、中世初期のアイルランドには、紀元前4世紀のなかばごろからこの土地に定着したケルト人すなわちゲール人の氏族制共同社会の生活がいとなまれていた。そして西ローマ帝国の崩壊後には、この島は聖者や学徒の避難所となり、ヨーロッパにおける宗教や学芸の中心地とさえなった。一時、デーン人およびスカンディナヴィア人の侵入掠奪を受けたことがあったが、それも幸いにして撃退された(5—7ページ)。

こういったアイルランドに対し、1169年にイングランド人の侵略と土地の収奪が始まった(7ページ)。そして侵略者の性格は時代とともに変化をみたのであるが、こんどは撃退されずにペティの時代まで続いた。アイルランド人は、もちろんこれに抵抗した(8, 15ページ)。ことにペティの時代に起こった反乱は規模の大きいものであって、それは1641年10月に勃発し、52年5月にクロムウェルの軍隊によって鎮圧されるまで11年間断続的に戦われた(32, 39ページ)。そしてイングランド人を殺害し、収奪された土地を奪還した(33ページ)。

イングランド側がこれに憤激したのは、もちろんのことであった。そして徹底した収奪と植民を計画した(34ページ)。もっとも42年8月、本国の市民革命がついに武力による内乱戦に発展したために当座は決定的な1歩

をふみ出すことができず、アイルランドでは無政府状態がふかまって行った(39, 48, 46ページ)。

しかし市民革命が勝利し、49年1月にチャールズ1世が処刑され、共和国が樹立されると同時に、クロムウェルによるアイルランドの征服が開始された。そしてそれは3年後の52年5月に完了する(48, 50ページ)。

反乱後のアイルランドの荒廃はひどいものであったが(51ページ)、その荒廃したアイルランドに対して、イングランド共和国の収奪＝植民が強行された。アイルランドの総面積2000万エーカーの55%にあたる1100万エーカーがこの時期に没収された。反乱に参加した者の土地で、ことに上層階級が犠牲となった(126, 57—58ページ)。そしてこのうち1050万エーカーが分配の対象となり、それは(1)「募金法」(1642年)にもとづき戦費に充てるための募金に応募していた投機者と、(2)反乱の鎮定に従軍し、未払給与の支払をうけるべき将校兵士と、(3)軍需品その他を前貸したご用商人との3者(3万2000人といわれた)に分配された(138, 61ページ)。もっとも「募金法」が制定されてから反乱が鎮定されるまでの10年間は、投機者にとってはなほだしく失望的な期間であったから、かれらの中には「投機の権利」を当初の応募金額よりもはるかに安い価格で売りわたす者が現われ、また将校兵士の中にも、かれらの未払給与額——したがってかれらとその償還を要求しうる債権額——を記載した「給与債務証書」を、生活の必要上安く手放す者が現われた(40, 141ページ)。そしてこのようにしてアイルランドの地にはイングランド新教徒による大土地所有が確立され、強制移住をまぬかれてシャノン川以東に残留したアイルランド人大衆は、かれらのためのみじめな借地人に転落してしまったのである(142ページ)。

ところでペティは、アイルランド派遣イングランド共和政府軍の軍医監となって、1652年9月10日アイルランドの土をふんだ。アイルランド人の抗戦はまだ完全には終息しておらず、この島国は荒廃して砂漠のような状態となっており、クロムウェルの収奪＝植民計画がその形をととのえ、実施されようとしていた時であった。この時ペティは29歳であった。1646年に大陸遊学を終えて帰国してからのかれの社会的進出ぶりは、まことにめざましいものがあった。すなわちかれは、自然研究者として、機械器具の発明家として、特異な「教育論」(1648年)の著者として、名声を高め、オックスフォード大学から医学博士の学位を授与され、つづいてその解剖学の正教授になり、一方ではペイコンの学徒たちによってつくられていた「不可視の学院」において活躍し、グレン

ラム・カレッジの音楽教授にも迎えられる等々という状態であった。そこでかれのアイアランド渡航は、相当の理由があるにはあったのだが、一見いかにも唐突の感をまぬがれないほどのものである(69 ページ以下)。

ペティは軍医監としてもきわめて有能で、功績があったのであるが(71—72 ページ)、54年12月、没収地の実測による地図の作製を主目的とする測量を主宰することになり(107 ページ)、続いて没収地の分配事業を主宰した(125 ページ)。没収地の分配事業を主宰することとなったのは、その測量を主宰したからであるが、測量を主宰することとなったのは、その前年、測量監ワーズリの指揮のもとに行なわれたいわゆる「概括測量」を、ペティが注意ぶかく観察し、その上でその実施方法の誤りを痛烈に批判し、1654年9月にみずからの指揮のもとにアイアランドの「幾何学的な」測量を行なうことを当局に提案したからであった(72—73 ページ)。

この間ペティは、兵士たちから「給与債務証書」を捨値で買い集め、ケリ県その他の地域に広大な土地を取得し、一躍して大土地所有者となった。その後議会へ告発され、公職から斥けられて、一時、失意の人となるのであるが、王政復古時代になると、国王チャールズ2世から愛され、ナイトに列せられたばかりでなく、主としてアイアランド関係のさまざまな官職についた。また共和国時代にかれがアイアランドにおいて取得した土地は、国王からあらためて授与され、しかもそれはこの時代を通じてめざましく増大し、ついに27万エィカ(約10万町歩)にも達し、このようにしてかれは18世紀以降におけるウィッグ党の名門ランズダウン侯爵家の始祖になった(149, 152, 167, 3 ページ)。南部イングランドの小さい田舎町の貧しい織元の3男坊として生まれ、一時は水夫となり、フランスの海岸に遺棄されたことさえある(上巻 39, 56—57 ページ)ペティとしては、原因はいろいろあったのだが、想像外の栄達といってよかろう。

そしてペティは、さらに『租税貢納論』(1662年)その他、先年松川教授の手でわが国に紹介された数編の名著を書いて、経済学、財政学、統計学、計量経済学等の分野でも、先駆者的な業績をあげるのである。

松川教授の『ペティ』の下巻は、このような社会的政治的諸事情の変転と、その中でペティの生活および実際のならびに学問的業績を、しかも当時の諸事情の変転の——そしてペティの生涯および実際の学問的事業の——の1こま1こまを区切り、前者に対する後者の関連を追及しつつ、描いている。この書物の上巻が出版されたとき、白杉教授は「著者の博覧渉獵」、「叙述は、利用しう

るかぎりの史料と研究とを駆使して、周到であり、しかも簡潔である」と言われたが、この下巻も同様である(『経済研究』第10巻第2号184ページ)。

私は、仕事の関係から、この書物を、ペティにおいて経済学はどこまで作り上げられていたと考えるべきであるか、その経済学は、医学、統計学その他、他の学問や、アイアランド等々のその当時の経済事情の単なる記述や、政治上の意見など、どのようなものから、どのようにして、分化し独立して形成されてきたか、このような経済学の分化独立とその当時の社会的諸事情との間の関係はどのように考えたらよいか、という問題の観点から読んだ。そしてこの問題について考えるための貴重な資料と示唆を与えられたのであるが、しかしこの時代のイギリス史は、いろいろの観点からいって、非常に興味のあるものである。またペティという人物も、決して平凡な人物ではない。単純な経済学者ではなく、単純な学者でさえもなかった。そしてその学問的業績は実に多方面に関連している。だから、松川教授のこのペティ研究は、疑いもなくいろいろな専門の人にとって有益であろう。

[末 永 茂 喜]

本 田 創 造

『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』

岩波書店 昭和39年3月 vi, 225, 41ページ

[一橋大学経済研究叢書 15]

戦後のアメリカ経済史の研究は戦前にくらべて一段と発展したようである。とくに、戦前にわれわれの見ることのできなかつた多くの原資料が自由に使えるようになったことが研究の発展のために大いに役立っている。これらの原資料はひとつには地方史研究の資料や、代表的な政治家・商人などの全集・文書などが数多く出版されまた入手できるようになったこと、また他方では政府の歴史的な文書およびセンサス類がわれわれの間に揃いはじめたことによって、その使用が可能になりつつある。そこでこの頃では、これらの原資料を駆使しないでは歴史的研究とはいえないというような状況になってきている。

本田創造助教授の近著『アメリカ南部奴隷制社会の経済構造』はこのような資料をふんだんに、しかも批判的に使ったアンティ・ベラム期南部についての新しい本格的な研究である。

本書の内容は表題のしめすとうり、南北戦争直前の時期にいたるまでの南部の経済的分析であり、南北戦争を